

中学生の時、母が苦笑しながらPTAの会から帰って来て、こう言った。

「ちよつと前にIQのテストをやったそうじゃない？ T先生（担任）の話では、あなたのIQ、86だったんですって。平均よりずうっと低いんで、先生、驚いていた。何かのまちがいでしょうって言うことになったんだけど……」。

私はエーッと驚いた。秀才とか優等生というのではないけれど、勉強はそこそこできたので、自分で「平均以下」と身にしみて感じたことはなかったのだ。「解答の仕方をまちがえたんじゃない？」という母の言葉に私は大きくうなずいた。

ところが……大人になるに従って、このIQ 86事件をたびたび思い出すようになってしまった。

オカネのことになると、私の頭は俄然、IQ 86の世界へと突入してしまうのだ。オカネのことを考えるのが、しんそこ面倒くさい。わからない。イヤなのだ。

と書くと、オカネに関して無欲恬淡^{てんたん}としているかのようだが、そんなことはない。オカネは欲しい。できるだけたくさん欲しい。「サイフ軽ければ心重く、サイフ重ければ心軽い」というのをしみじみと実感する日々なのだ。



絵・江口修平

金銭IQが低すぎて

中野 翠

要するに、オカネのことを考えずにすみ程度にオカネが欲しい。これに尽きますね。

二十数年前から二歳下の妹が週に一度やって来て、おもに経理の仕事を引き受けてくれている。妹は主婦で、私とは全然違って、オカネに関するIQが高い。私が忌み嫌っているポイントカードやサービス券の類^{たぐ}いも決して面倒くささらず、セツセと活用している。

妹は私の経済状態をガッチリと把握している。私以上に詳しい。銀行のATMで私のお金を引き出すのも妹で、私のサイフを見て、適当に補充しておいてくれる。

銀行、生命保険会社、税理士などの応対も妹がやってくれている。私はそばでひとごとのようにポカンとしているだけなのだ。

妹がいてくれてほんとうに助かっている。ありがたい。けれど最近ちよつと不安になって来た。妹もいい歳だ。私の所に来られなくなったり、いなくなったりしたら、私はどうしたらいいのだろう。あまりにも依存しすぎて来た。そろそろ「自立」を考えるようにしなくてはいいのだから。うーん、気が重い。



なかの・みどり●1946年、埼玉県生まれ。コラムニスト。早稲田大学卒業後、新聞社でのアルバイト、出版社勤務を経て文筆業へ。1985年『サンデー毎日』に連載開始、現在も継続中。『週刊文春』映画欄の評者の一人でもある。著書に『今夜も落語で眠りたい』（文春新書）、『小津ごのみ』（ちくま文庫）、『歌舞伎のぐるりノート』（ちくま新書）など。